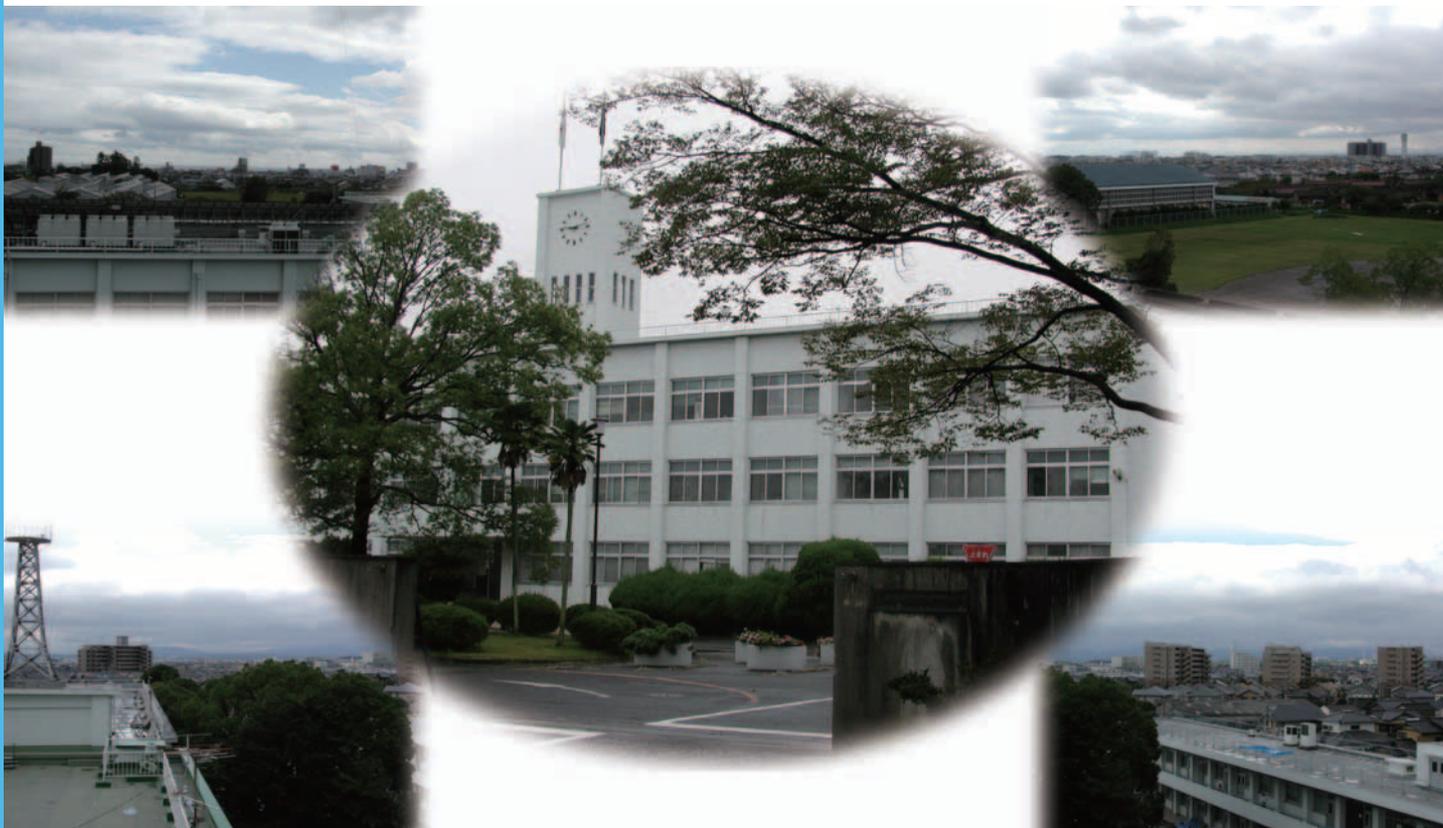


2008年号

# 青峰同窓会会報



## 会長挨拶

青峰同窓会会長  
 小手川 智 (42C卒)



## 『同窓会の継続的な発展を願って』

同窓会会員の皆様にはお変わりなくご健勝のことお喜び申し上げます。今年の夏の暑さはとりわけ厳しいものでした。またゲリラ豪雨と称する集中豪雨が頻発し、ここ三重県でも大きな被害を受けました。これらは地球温暖化による異常気象と言われております。多くの方が地球環境に対する不安や危機が高まっていることを実感させられる思いでした。この他にも原油価格の高騰が引き金となった食料危機や物価の上昇があり、お米に代表される食の安全が脅かされる等々、まことに暗い出来事が多い昨今です。こうした中で開かれた北京オリンピックは日本選手の活躍や世界各国の選手の活躍に感動した夏でもありました。思い起こせば1964年に日本で初の東京オリッピ

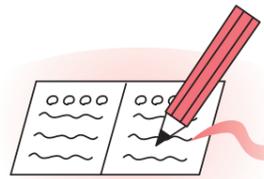
クが開催されました。44年前になります。大会期間中、学校は休校となり各自テレビで観戦することになりました。宿題はオリンピックに関するレポートを後日提出せよとのことでした。実に寛容しておおらかな配慮であったと大変懐かしく思い出されます。古き良き時代とはこんなことを言うのだと思っています。

母校では今年のロボコンに向けて後輩諸君が最後の仕上げにかかっている頃と思われます。後輩たちが必死に挑むその姿は感動ものであります。NHKで放映されますので応援して下さい。

同窓会会員の皆様には同窓会に対して今後とも暖かいご支援とご協力をお願い申し上げます。

# contents

会長挨拶.....1	退職教職員.....11	SHTN便り.....16
卒業生便り.....2	齊藤教員	会計報告・予算.....16
星野 克明	宮崎教員	
渡邊 暁	松林教員	
中瀬 克己	大江職員	
学科近況.....7	荒川職員	
	原田職員	



## 卒業生便り

### 特別寄稿 星野克明氏 国土交通省大臣表彰を授与

昭和42年工業化学科卒業の星野克明氏は、平成20年7月10日に平成20年建設事業関係功労者国土交通大臣表彰を授与されました。

表彰理由：永年にわたり宅地建物取引業に精励するとともに15年間にわたり社団法人三重県宅地建物取引業協会の要職を歴任し、不動産業の振興功労及び同協会の発展に寄与した功績による。

星野氏は現在（社）三重県宅地建物取引業協会の相談役を務められており、氏が27才の時（昭和49年）に設立された不動産業である桑名興商の代表として経営に励んでおられます。



卒業生の皆さんお元気ですか。私、一期生の星野克明と申します。この度、国土交通省の大臣表彰を受章致しました。これを機会に本誌に寄稿させて頂くことになりました。執筆をお引き受けしたものの読者の年令に相当の幅がありますので、どんな内容にしたものかと悩みました。又講演やリポートのように決められたテーマはありませんので、この小文は私のひとつのエッセイとして読んで頂ければ幸い

です。紙面の関係もあり詳細な記述は不可能ですし、多くの内容を盛り込めないのは残念ですが、それは別の機会に譲るとして、ここでは読者の皆さんが読んで参考になった、生き方の為になったという内容にすべく留意しました。

皆さんも同じと思いますが私は母校に在学中は人生論とか生きるとは何か、人生とは何かというようなことをよく考えました。立派な図書室には多くの蔵書があり、どんな本も読むことが出来たことを懐かしく思い出します。六十一才になった今では人生とは何かということがはっきりとわかるようになりました。しかし四十才頃はどうか生きるのが一番良いのかを、まだ一生懸命に考えていました。暗中模索の状態でした。人々がよく言うように一度しかない人生だから大切にしないといけないと誰よりも私は強く思っていたようです。そして常に考えていたのは、人生の終わる瞬間、つまり死ぬときに、いい人生だった、面白い人生だった、痛快な人生だったと思って死んでいけるような人生こそ一番だということでした。又、それとは別に私が人生の至上命題と



してきたのは人間は一生の間一体どれだけのことを成しとげることが出来るかというものでした。自分自身でそのことを一生をかけて実験してきたという訳です。

話題を変えますが事業経営者の常として、どうしても景気に左右されますので経済に詳しくないと生きられません。二十代の頃から経済学にのめり込み全くの独学で世界経済の流れを研究しました。甲斐あって人より深く勉強できたと自負しています。その道(探求心)は今も続いており益々拍車をかけております。少し身近な話をしましょう。今誰もが困っているガソリンの値上がりですが、いうまでもなくニューヨークのWTI原油先物相場の高騰によるものです。評論家やキャスターは投機マネーが原油市場に大量に流入し相場を押し上げているといい、けしからんと言う論調です。一般庶民から見ればその通りなのですが、これは一言でいうと資本主義である以上仕方のないことなのです。資本主義の行き着くところはこういうところなのです。つまり今、世界では余剰資金が投機マネーとなって獲物を求めて移動しています。そしてこの余剰資金はジリジリと増加し続けています。なぜなら世界中の富の合計は一日一日増加の一途で減ることは絶対にありません。世界の人々は必ず働いて経済活動をしているからです。一人一人が必ず富を生み出しており、その総合計は常に増加しています。個人の富の増加分はとりあえず預金という形を取りますが、銀行は集まった金を必ずどこかで運用しなければなりません。その金が形を変えて大量の投機資金となって世界を巡るわけです。世界の富の増加=余剰資金の増加=投機マネーの増加という図式で世界の投機マネーの合計が増加し続けるのは必然なのです。それが資本主義の本質なのです。避けることはできません。投機マネーを嫌う庶民感情は理解できますが、今や世界は

(資本主義のフェーズは)物作りの時代から金融の時代へと移行しています。人々が好むと好まざるとにかかわらずです。理由は一つ、世界の富が増加し過ぎて余剰マネーの総額が実体(実物)経済の規模よりはるかに大きくなってしまったからです。そうなるにマネー自体が一つの経済主体として行動するようになります。もはや逆戻りはあり得ません。マネーに縁のない世界の大多数の人々(庶民)にとってそれは決して幸せなことではありません。資本主義の欠点(最大の短所)がついに姿を現したということでしょう。ガソリンの値上がりはほんの小さなことですが、人々にこのことを気づかせる最初の出来事にすぎません。もう皆さんもお気づきでしょう。ここまで説明すればおわかりと思いますが、もし今現在皆さんの誰かが株式投資をしていて買値から大きく値下がりして動けなくなっているとしても決して心配することはありません。余剰資金(投機マネー)は常に獲物を求めて動き回りますので、いつか必ず株のマーケットへ流入してきます。その時が株が上昇するときなのです。待つことが大事です。一つだけ注意しなければならないのは会社は倒産することがありますので、つぶれる会社の株を持っていると紙くずとなります。確率は低いのですが、あまりボロ株は避けるべきです。

紙面も限られてきました。最後に今私が特に注目しているのは地球温暖化の問題と新型インフルエンザです。今年の夏は私が生まれてからこれまで一番暑い夏でした。この暑さが来年も又来ると思うとうんざりです。しかしこれから年々ひどくなっていくと思います。これが地球温暖化の恐ろしさです。軽井沢や北海道が住みたい町人気ナンバーワンとなるのは遠くないことでしょう。首都移転の問題も別の理由(気温)から再燃するかもしれません。又、新型インフルエンザが発生するのは時間の問題で、いつ起きてもおかしくないと言っています。流行すれば家の外へ出るのは命を捨てるようなものです。水と食糧を備蓄しておくのが良いでしょう。

最後になりましたが、卒業生の皆様の一人一人が誇りを持って堂々と人生を送られることを心から願ひ、又、最後迄小文を読んで下さったことに感謝しつつ筆を置かせていただきます。

平成二十年八月二十三日記  
星野 克明

## 入社当時の思い出とこれからについて

### 渡邊 暁 (44E卒)

出筆依頼をうけてH20年4月19・20日の還暦同窓会(44E)の記事をと思いましたがいざ出筆となると何を書けばよいか迷ってしまいました。テーマは何でも良いとのことでしたので、5月末で定年退職を迎えましたので39年2カ月の会社生活を振り返って今後の生活をどうすべきか考えてみたいのでその一部を紹介したいと思います。

会社生活の序盤(15年間)は製鉄所の生産管理システム構築を主に取り組み、中盤(15年間)はソフトハウスで関連会社や一般企業の生産管理システム構築の請負作業のプロジェクトマネージャーとしてシステム開発に携わり終盤(9年間)は関連会社の鉄鋼業のコンピュータ関連全般、特に2000年対応、オフコンからオープンシステムへの移行、ネットワーク等現在の最新システムの構築への推進に邁進して定年を迎えて常にコンピュータ関係の仕事一筋に打ち込めたことは幸せなことと感謝しています。

しかし、家庭生活ではすべてを妻任せにして妻と子どもたちには気の毒なことをしました。たとえば、下の娘が1才半のとき娘が起きてるとき会社から帰ると恥ずかしそうにして私が父親であると認識できないでいる娘に戸惑いながらどうすることも出来ない自分がそこにいました。

いろいろありましたが、最初にした仕事は今でも鮮明に思い出せます。最初の仕事は入社後半年間の実習明け後、仮配属先でのコンピュータの黎明期にハードウェアとして磁気テープから磁気ディスクを増設してソフトウェアとして大量データの一括処理からリアルタイムへ一歩近づける処理に取り組んだことです。

話をすすめる前に当時のコンピュータについて少し説明を加えないと若い方には何のことか俄かには理解していただけないでしょう。そこで、当時私の担当していたコンピュータについて少し説明します。設置スペースはちょうど教室くらいでそこに出力装置のラインプリンタ、カードパンチ、入力装置はカードリーダー、磁気テープ、新規システムのために増設した紙テープ読み込み装置と磁気ディスク装置およびメモリ装置で埋め尽くされていました。すべての筐体は大きく重量があるため設置後簡単には移動出来ませんので保守のためのスペースも当然必要でした。また冷却装置も水冷式のクーラー(タワー型)で外部のスペースも今では考えられないほど広さが必要でした。

※当時製鉄所内の一般の事務所にはまだ冷房が普及していませんでしたのでコンピュータ室の併設の事務所では冷房がありました。私も夏の暑い最中冷房のない事務所のうちわ片手に仕事をしたことを思い出します。

それにコンソール卓です。今では入力作業は画面を見ながらするのが当たり前ですが当時はデータはカードにパンチ(穿孔80桁の英数字)するのが普通でした。余談ですが、現場からの実績入力のカードパンチャーは男性でした、女性は夜間勤務が出来ませんでしたから、それでも当然製鉄所には多くの女性パンチャーがいました。コンピュータへの指示入力、コンソール卓から行うのですが画面ではなくロール紙(トイレットペーパーを2個横に並べた大きさ)へゴルフボール大のヘッドで英数字を出力します。(勿論日本語はカタカナさえまだ使えませんでした。)

※当然ロール紙は出来るだけ途中で切断せずに裏も再利用していました。

メモリは16Kバイトから32Kバイトに増設しても現在では信じられない容量です。(メモリは当然LSIではないので体積は信じられない大きさでした。装置全体も重量級です。)20数年前に新入社員にこの話をしたらK(キロ)ではなくM(メガ)の間違いはと質問されるほどでした。また磁気ディスク装置も3台でしたがリムーバブル(取り外し交換)ディスクの容量が小さいので1ディスクに1ファイルを割り当てていたため同時に扱えるファイルは3個のため処理の構成(順序)を考える必要がありました。(リムーバブルパックはLPレコード10枚を重ねたイメージです。読み書きのヘッドがレコード盤の両面を挟むスペースが必要なため高さは20cmくらいだったと思います。従って交換時の作業は両手で行っていました。今では想像もつかない話ですが本当の話です。)

OS(管理プログラム)の機能は装置への入出力の制御程度であとはすべてプログラミングする必要があります。当時機械語から高級言語としてCOBOLが採用され私の入社からは機械語の社内講習会は廃止されました。COBOL言語から機械語への翻訳(コンパイル)はまだまだ稚拙だったためテスト時は機械語の知識が必要であり、またメモリ内に展開された内容もデータ領域、実行命令と確認しながらですのでプログラムのコーディング技術やデバッグ(プログラムのミス探し)技術も身につきました。

※高専時代授業とメーカーの講習会でFORTRANを習いましたが座学のみでテキストを見ながら講師が黒板に手書きした命令(プログラム)を眺めていたと思います。(講習会は確か抽選に当たった数名が参加出来たのだと思います。場所は名古屋だったと記憶しています。)

実機に触れたのも当然入社後でした。私の最初の大きい仕事はランダムアクセスファイルの設計でした。今で

はデータベースシステム(たとえばパソコンでは、ACCESS)等ありますからその操作説明書に従えば使うことが出来ますが当時はデータベースもなければランダムアクセスファイルすら手作りする必要がありました。キー変換式(特定の入力項目、受注No、現品キー等ユニークになる項目から)格納場所を決める。(読み込む場合も同様にこの変換を行う。)この変換式に素数を使うと格納場所が分散されるとのことで、この素数を求めるのにFORTRANを初めて使いました。

※FORTRANを仕事で使ったのは初めて最後でした。

メモリが少ないので実行結果をその都度(1行分)単位にプリンタ出力していくため数字が大きくなってくると最初はパタパタ音を立てていますがプリンタ出力が忘れたところ1行出力される30分位に必要な箇所が出来たので処理を終了させました。今ではディスク容量はさほど意識する必要はないと思いますが当時は容量が限られていましたから受注情報、現品管理情報、検査実績、出荷実績等を1ファイルで収めるように1情報あたりの情報量(当然今使用している情報に付加すべき情報を含めた)および必要最小保存期間等を考慮して、当然物理的に無駄の発生しないデータサイズ、登録件数、ランダムアクセス格納場所のオーバーフロー領域の設計、当然処理時間等すべてを含めた最適な解を求める必要があります。

ここでも、今は電卓もあるので容量計算も簡単ですが当時私は算盤では足し算、引き算しか出来ませんので、特に割り算には計算尺と筆算でしたので大変でした。※のちに歩留まり計算の検算には手回しの計算器を使っていました。へたくそなので常に一回余分に回すので警告のチーンと音を立てていましたので事務所の皆からよく音を立てないように遠回しに注意されました。※計算尺や手回しの計算器については、若い方には見たこともない過去の遺物となっていますね。

ファイル設計において当時学生時代に得たモーターの設計技術が非常に役にたったと感じていました。今ではどうだったのかあまり思い出せんが安全率の考え方がファイルの容量の余裕率や拡張性を考える上で通じるものがあつたと思います。当時はシステム設計・構築はディスクの物理的フォーマットからすべてを一人で完結しなければなりませんでした。その後のデータベース設計からはシステムも巨大化したためひとりの守備範囲も狭まり、詳細まで理解出来ないことが増えてきました。

このランダムアクセスファイルのおかげでリアルタイム処理もどきへ一歩前進です。現場の端末から現品情報(現品No、工程、長さ)の入力は作業指示として事前に出力された随伴伝票(袋状に)とパンチカード(現品Noと作業指示内容がパンチされているカード)を伝票の袋から取り出して端末に読み込ませる。作業した工程の情報はトークンカード(プラスチックだったと思う)を使う、作業者が入力するのは重量か長さ等



今年4月20日クラス会での学校訪問時。寮門前で伊藤進氏と著者(左)

現品の状態の変化のみを入力する。この入力リアルタイムでコンピュータ室の紙テープにパンチ(穿孔)される。リアルタイムもどきと言ったのはたしかにデータ収集はリアルタイムに違いないがファイルを更新するのは日に3回穿孔された紙テープをちぎって紙テープ読み取り機で読み込む。従って更新直後の現品情報は最新になるが時間の経過とともにあてにならないが8時間後には、また最新情報になる。これでも現品の進捗把握が格段により工程マンは事務所から現場に確認に行く回数が減り作業効率アップに繋がり今では考えられない省力となった。

また、システムの対象の業務知識(特に生産管理では、ものの流れと情報の流れ)を理解し人間とコンピュータの役割とそのインターフェース(入力項目、入力方法、入力タイミング等)の設計のつぼが掴めかけたところで、ソフトハウスへ出向となりいろいろな企業および人々に会うことが出来て生産管理以外の知見を広めることが出来ました。

まだまだ回想録は続きますがこの辺で今後の自分について考えてみる必要があります。まだ退職から2カ月たらずですが、また6月初めにオーストラリアから一時帰国している4才と1才の孫娘と過ごして自分の娘二人の子供時代を思い出そうとするのですが断片的にしか思い出せません。罪滅ぼしにせめて孫娘とコミュニケーションが上手にとれるように努めたいと考えていますが具体的にはどうすべきかこれからです。孫娘は二重国籍ですが日本は二重国籍を今のところ認めていませんのでいずれ選択をせまられることでしょう。

最近、言語とは国籍とは何かと考えさせられます。日本語とは深く追求していくには漢文の素養が必要ではとか、孫娘とコミュニケーションには英語も必要になるとか、また昔の趣味もまた復活させてアナログのレンズをデジタルのカメラにつけての手動で焦点とシャッタースピードを調整しての写真撮影、鉄道模型のパソコン制御の自動運転のプログラム作成してみたいとか、フリーソフトのエディターでHTML言語でホームページの作成をと、やりたいことは尽きません。(ホームページ作成は最後の会社のホームページ作成を実際に担当していました。)ただいま、主婦(主夫)見習い中でいろいろ思考していますが、今後の生活リズムを早くみつけないと思っています。

## カンボジアでの戸惑い

中瀬 克己 (47E卒)



水面に写るアンコールワットの前で

先日家族とカンボジアで遺跡巡りをしました。その際のツアー参加者の対応は興味深いものでした。遺跡では現地の人や子供たちが多数お土産を売りにきました。一人から買えば後が大変、法外な値段で売りつけられるのではといった心配もあり、無視して歩いていました。他にも手を出す人は見かけませんでした。私と似た気持ちだったのでしょか？1ドル2ドルに困っているわけではないので、子供たちの姿を見ると一方で申し訳ない気持ちにもさせられます。不安とあいまって、とても友好的とは言えない冷たい態度だったように思います。折角訪れた国なのに、現地の人との交流はなかなかできません。

その中で、二人連れの女性が絵はがきセットを子供から

買いました。少し外れた遺跡だったので売る人も少なかったのですが、それがきっかけか、別の人たちも1セット買ったようです。そして、この2組が何枚かの絵はがきを交換しながら楽しく話していました。後から売りに来た子供たちには、もう買ったからこれ以上はいらない、ことをはっきりと態度で示しつつ、にこやかな笑顔でした。確かに断ることと冷たく拒否することとは別です。

二人連れの一人は、世界一早いボルトでも有名になった国ジャマイカで日本語を教えているとのことでした。意見をはっきり伝えつつ、敵意がないことも同時に表現できるすばらしい対応だと感心して見ていました。海外での経験が現れたのでしょうか？私はこのようなコミュニケーション技術が十分習得できていないように思います。海外赴任する同級生も多いのですが、皆さんどうしているのでしょうか？そう言えば先日久しぶりの同窓会に参加しましたが、海外での生活は話題に上りませんでした。次の機会には尋ねてみるのもいいかもしれません。文化や背景が異なる外国での人とのコミュニケーションはなかなか難しいものですが、これをヒントにして、これからは少しははっきりとかつ友好的に伝えて、後味のいい海外旅行を楽しんでみたいと思います。最近コミュニケーション不足が職場でも大きな問題になっています。できれば日本の生活でもこの様な対応ができるとういのですが。



アンコールトム 家の広場の上で通せんぼをする子供



ジャングルに埋もれる遺跡



意外に混でないアンコールワット



村の市場

## 学科近況

### 教養教育科の近況

奥 貞二 (45C卒)

H19年度は、大きな変化がありました。英語の松林先生と数学の斉藤洪一先生と体育の宮崎先生が退任されました。松林先生におかれましては、6年間の学生主事、それに学科主任、英語科責任者と、要職を歴任され、定年退職されました。前年度からスタートした再雇用制度で、50周年記念誌、学報「鈴風」担当の特任教授として今までと変わりなくお見えになっています。後任については、定員の関係で、英語は採らないということで採用されませんでした。次は、数学の斉藤先生です。昭和44年4月以来、40年間の長きに渡り、縁の下の力持ち存在として、高専数学教育に尽力されました。ご苦労様でした。後任には、九大大学院を終えられた篠原雅史先生(鹿児島出身)が、着任されました。明るく1年生の授業を中心に担当され、サッカー部の顧問をされています。最後に、体育の宮崎先生も、39年の長きにわたり、高専体育のために尽力を尽くされました。在職中体育科の責任者、体操部、サッカー部の部長を指導され、何度も全国大会へ駒を進められました。後年体調を崩され、定年まで1年残して退任されました。本当にご苦労様でした。時々、テ

ニスに顔を見せてくれています。体育の後任には、福岡大学より、森誠護先生をお迎えしました。森先生は、水泳がご専門で、今年からは水泳部が高専大会で活躍しています。若い力で、高専の体育を盛り上げてほしいと思います。研究室ですが、松林先生の部屋に、林先生が入られ、林先生の部屋に松林先生が入られ交替しました。船越先生は、2Fの宮崎先生の部屋に、船越先生の部屋には森先生が入られました。

愈々木村和二郎初代校長先生を知らない世代で、鈴鹿高専が出来上がりつつあります。

そして、今までは「一般学科」と読んでいたのですが、4月から、「教養教育科」と名称変更になりました。我々古い者は、つい一般と言ってしまいがちですが、皆様も気を付けて頂きますようお願いいたします。

それと授業時間が、試行的に100分授業を2年間続けてきましたが、平成20年度から、95分間32回授業という形式になりました。

今は、西岡学生主事を頭に、土田学科主任、安富数学責任者、細野体育責任者、大矢理科責任者、中井外国語責任者、奥人文責任者というメンバーで、スクラムを組み頑張っています。

### 機械工学科の近況

藤松 孝裕 (62M卒)

機械工学科および本校の卒業生の皆様におかれましては、ますますご活躍のこととお喜び申し上げます。本年度におきましては、昨年同様のスタッフにて学生指導に取り組んでおります。本年は各先生方に近況・皆様へのメッセージをいただきましたので、紹介させていただきます。

**打田**：もう、今年で61歳になります。昨年3月まで学科主任をし、学生の進学、就職のお世話をしてきました。現在は暇になったと思うのですが、以前と同じように学生の出入りが多く、様々な相談に対応しております。

**埜**：西谷正先生(名誉教授)の後任として赴任して、早くも5年目になりました。昨年度から学科長(主任)を務めています。学科の運営や5年生の就職・進学指導に、多忙な毎日を過ごしています。

**佐藤**：平成18年4月に三重大学から着任いたしました。今年で33年目となりようやく高専流になれてきたところで、こちらでは、機能加工研究室でレーザー加工に関する研究を立ち上げました。

**富岡**：すっかり歳をとってしまい残すところ2年余となりました。現在は担任などもなく相変わらずロボコンと写真部の面倒をみえています。一部の卒業生とはお話しする機会が多いです。

**末次**：現在3Mの担任です。皆さんのところで工場見学にお邪魔してもよいところがありましたら、是非ご一報下さい。

**近藤**：D専攻主任として進路担当も行っており、相変わらず忙しい毎日です。先日、プラハでの国際会議で、卒業生が口頭発表する姿を見ました。皆さんが「世界に羽ばたく創造的なエンジニア」として活躍することを祈っています。

**民秋**：今年は5年生の担任をしています。進路が決まって少し気のゆるんでいる学生が、後期の授業や卒業研究に集中して取り組んで無事に卒業できるよう、あの手この手を考える毎日です。

**藤松**：1年おきの担任を終え、一休みの本年と思いきや、10月のJABEE受審に向けての準備で大忙しだった前半戦。後半戦は少し休めることを期待している今日この頃。

**白井**：世界中で利用されているe-LearningシステムMoodleの日本語対応版(fs\_moodle)を開発。社内教育用システム、グループウェアとしても有用ですので導入御検討下さい。もちろん無料です！

**白木原**：赴任2年目での4年生担任。夏休みのインターンシップが終わり、高専祭の準備で学生さんの小遣いさんになっています。そのあと控える工場見学旅行も準備しなくては。

## 電気電子工学科の近況 近藤 一之 (52E卒)

卒業生の皆様、お元気で活躍のことと思います。電気電子工学科の近況を報告させていただきます。まず、昨年の同窓会報が発行されて以降の学校行事から。H20年1月30日に第46回マラソン大会が行われました。卒業生の皆さんも鈴鹿おろしの吹く中、懸命に走ったことを思い出されると思います。鈴鹿高専創立以来続いてきたマラソン（クロスカントリー）大会ですが、昨今の交通事情には勝てず、ついに今回が最後の大会となりました。2月7日には卒業研究発表会が行われ、1年間の成果を5年生が発表しました。4年生からも質問が出るなど活発な発表会となりました。3月22日に第42回卒業式が挙行され、初めての「電気電子工学科」の卒業生43名を無事送り出すことができました。

年度が替わって4月7日、入学式が行われ初々しい1年生41名を電気電子工学科へ迎えました。そして4月以降は新5年生の就職活動が本格化しました。今年度も求人をしていただく企業数は非常に多く、電気電子工学科だけで700社を越えています。これも卒業生の皆様のご活躍の賜であると感謝いたしております。それと同時にこの社会からの期待に応えるべく、在学する学生に実力をつけさせて送り出す使命感も新たにしています。進学は5月下旬の専攻科推薦入試を皮切りに6月～8月にかけて編入試験が実施されました。この2年の進路状況は就職・進学の希望者が半々となっており、進学希望の学生が増える傾向にあります。

皆さんの活躍のお陰で、社会からの電気電子工学科に対する評価はとても高いのですが、中学生からの人気は今ひとつなのです。これは鈴鹿高専に限ったことではなく、どうも大学も含めて全国的な傾向のようです。今の若者にとって電気製品はあって当然のごとくに存在し、電気電子技術の粋を集めたものであるなど

という感覚はあまりないこと。生産拠点の海外進出などから、日本国内での技術は衰退していく産業であるという誤解。これらのことが原因なのでしょうか。ともかく鈴鹿高専電気電子工学科を志望してくれる中学生を増やすべく色々方策を試しています。卒業生の皆様も色々な機会に電気電子工学科の良さをお話しいただけると幸いです。

先生方の構成は3年前から同じメンバーで学生と共に頑張っておられます。先生方の主な担当科目を下に示しておきます。先生方の顔と授業風景を思い出していただければでしょうか。また実験では鈴木昌一技術専門職員、山田太技術職員には以前と同じように指導してもらっています。E科平成12年卒の板谷年也技術職員にも3Eの実験指導をお願いしています。それでは、卒業生の皆様、健康に留意され、ますますご活躍されることを心より期待しております。

鈴木昭二先生：電気磁気学、通信理論  
川口雅司先生：計算機システム、応用情報処理  
北村登先生：半導体工学、電子デバイス  
西村一寛先生：電気回路、電気電子工学演習  
花井孝明先生：電気機器、電気回路  
柴垣寛治先生：電気電子材料、電子物性基礎  
伊藤保之先生：電気製図、電気電子計測  
奥野正明先生：電気電子工学序論、実験  
中野荘先生：高電圧工学、電力システム工学  
近藤一之：電子回路、デジタル回路  
奥田一雄先生：電気回路、電子制御基礎

## 電子情報工学科の近況 長嶋 孝好 (48E卒)

卒業生の皆さまには、いかがお過ごしでしょうか？ 学生の就職、インターンシップや工場見学等では、いろいろとお世話になり、ありがとうございます。まず、教職員の「声」から、いくつかの近況報告・メッセージをお伝えしたいと思います。

**森**：着任して2年目です。行事が一回りして大体どんな行事があるか分かってきました。たとえば秋の高専祭は卒業生の皆さんにとっても、非常に思い出深いのではないのでしょうか、昨年度は2名の卒研究生が来てくれました。今は2人とも企業でご活躍のことと思います。今年は4名が配属されました。相変わらず自転車操業中です。インターンシップの巡回では、卒業生の方々のご活躍の様子と、4年生が一生懸命働く様子が拝見できました。

**田添**：平成20年、1年生のアカウントはh20 i、1科はh1 iからスタートしていますので数えやすく、ちょうど20期生となります。インターネット・ブームに乗って、勢いに任せて突っ走った業界も落ち着きを見せるようになり、コンピュータはもう特別な存在ではなく、どこでも当たり前のように必要とされるものになりました。1科という存在も当たり前のように必要とされています。お互いに触れあいつつ、共にがんばっていきましょう。

**伊藤 明**：今年度のインターンシップは、4年在籍39名中35名が履修致しました。31社にお引受け頂き、実習先は三重県（5

名）、愛知県（11名）、東京都（10名）、大阪府（2名）などでした。受け入れ企業の中には鈴鹿高専の卒業生の皆様のご活躍の会社もあり、同窓生の皆様に接することができる貴重な場でもあったようです。次年度以降も、企業でのお引受け・ご指導のほど、宜しくお願いいたします。

**長嶋**：母校である鈴鹿高専に着任して、早いもので18年目になりました。現在こうして、後輩でもある若い学生のみなさんと一緒に、情報工学や数学を勉強し、そして研究できることを、とても有難く幸せな気持ちでいっぱいです。これも、私の高専学生の時代の恩師や友人たち、そして高専卒業後に会った方々のおかげであると実感しています。この夏は、私にはとても暑くて厳しい日々でしたが、美味しい果物や野菜をたくさん食べて、なんとか乗り切りました。

**井瀬**：「人間ドック」を受けてきました。標準体重より8kg多いとのこと、「もっと体を動かして体重を減らさない」と言われました。たくさん歩くのが良いようなので、時間を作って徘徊しようと思っています。

さて次に、各種コンテストなどへの学生の参加についてお知らせしましょう。まず、「プログラミングコンテスト」について、今年度は福島高専の主管で実施され、本選は10月11日と

12日に開催されます。これには、課題部門1チーム（4年生5名、田添先生の指導）、自由部門1チーム（4年生5名、箕浦先生の指導）、競技部門1チーム（3年生3名、渥美先生の指導）、が参加します。次に、「パソコン甲子園」には、3年生2名からなるチーム（プログラミング部門）が、予選通過20チームに入りました。本選は11月8日と9日に会津大学にて開催されます。さらに、機構とマイクロソフト主催のITリーダー育成キャンプに、専攻科1年生の高橋勲君が全国の高専学生の中から選抜され、ITリーダーとしての特別な教育を受けるチャンスをいただきました。

就職・進学については、現時点で、就職希望者12名、進学希望者は29名です。就職希望者については、全員内定をいただい

## 生物応用化学科の近況 岩田 政司 (50C卒)

卒業生の皆様におかれましては、ますますご活躍のこととお喜び申し上げます。本年はJABEE認定継続審査の年にあたり、現在、その準備を進めているところです。10名の先生方から近況報告をいただきましたので紹介させていただきます。

**【富澤 好太郎教授（学科長）】**  
最近運動不足で体力の低下を感じ、何か運動しなくてはと思っています。学校のほうは毎年新しい学生に接し気持ちを新たに以前と同じように手抜きをせず授業や卒研に取り組んでいます。勉強・部活・バイトなど色々な面で活発な学生が多く、学生の将来が楽しみです。

**【杉山 利章教授】**  
相次ぐ短期間での首相交代、原油値上げがもたらした物価高騰、少雨と大雨というコントラストの強い気象などに振り回されることなく、それらを乗り越えていく卒業生の皆さんの熱い情熱に期待しています。

**【澤田 善秋教授（50C卒）】**  
赴任後5年目を迎え、学生達と楽しく充実した日々を過ごしています。企業時代には想像できなかった生活です。研究の方は真似事ですが、細々と続けています。時間が許せば一度、のぞきに來て下さい。

**【長原 滋教授（52C卒）】**  
全国高専体育大会バドミントン競技の引率で函館に行ってきました。女子団体は3位の好成績を収めることができました。環境にやさしいグリーンケミストリーに関するテーマで研究を行っています。

**【下野 晃准教授（58C卒）】**  
着任して16年が経過し、定年退職（気が早い）までの折り返し地点までできました。これから益々在校生とは年の差が大きくなりますが、気だけは若く持って学生たちと楽しくふれ

## 材料工学科の近況 南部 智憲 (h02H卒)

**【国枝 義彦 教授】**  
校長補佐・研究主事・共同研究推進センター長として、産学官等の研究関係の仕事を担当し、学科の授業は専攻科で「資源工学」、学科では「無機材料」、「複合材料」、「機能材料」を行っております。また、クラブ担当は囲碁将棋部で囲碁関係を担当しています。研究は主に、「マイクロ波加熱

ります。また、進学の合格者（複数大学等合格の数も含む）については、鈴鹿高専専攻科（16名）、三重大学（4名）、名古屋大学（2名）、名古屋工業大学（4名）、豊橋技術科学大学（6名）、岐阜大学（5名）、大阪大学（2名）、筑波大学（6名）、広島大学（2名）、東京農工大（2名）、静岡大学（1名）、東京海洋大（1名）、豊田工業大学（1名）です。

最後に、近くにお越しの折、あるいは電子メール等で、学校・学科・教職員にアクセスくださり、皆様の近況・要望など、お聞かせいただければと思います。お元気で活躍ください。

あって行きたいと思っています。

**【中山 浩伸准教授】**  
2003年4月に外資の製薬会社より赴任してきました。分子生物学を基盤に研究を行っています。自分で考え、その場の状況にあった行動を積極的にとれる自律・自立性を持つ人材が育つようがんばっています。本年度は5年生の担任をしています。

**【山本 智代准教授】**  
昨年4月に赴任、今年から卒研究生も配属されました。また今年度は文科省の委託事業で女子中学生の理系進路選択を支援するイベントを企画・開催。今後も学内外で、未来の技術者・研究者の育成に尽力したいと思います。

**【高倉 克人講師】**  
今年度で赴任4年目です。新規な両親媒性化合物を合成し、それらが起こす動的挙動について研究をおこなっています。座学の方は、物理化学IIと工業物理化学、有機化学特論、反応速度論、化学総論を担当しています。

**【淀谷 真也助教】**  
赴任6年目になりました。春に自分と同時にこの学校に入学した学生を送り出しました。現在、卒研究生は学科生2人です。研究、部活を指導しながら、さらに、初めて担任（3C）をもつことになりました。頑張ります！

**【小川 亜希子助教】**  
2007年4月から本校にお世話になっています。動物細胞を利用した研究を進めています。現在は、周囲のサポートのおかげで小さいながらも実験室らしい佇まいとなり、卒研究生と切磋琢磨しながらハプニングと戦いつつ、直面するハードルを越えている日々です。どうぞ御鼻息に。

を用いた各種プロセスへの応用」（例えば、セラミックスの焼成や金属の製造、感染性医療廃棄物における滅菌への応用、など）を行っています。

**【井上 哲雄 教授】**  
学科長として3年目を迎え、その仕事に忙殺されています。本年度も多くの学生が、就職・進学とも希望のところ

に決定しています。みなさん機会を見つけて、母校に顔を見せてください。

【江崎 尚和 教授】

鈴鹿に転任してきてから15年目ですが、学校の法人化などもあり、年を追うごとに多忙になってきています。学校もずいぶん変わりました。特に目的がなくても結構です。一度「ふらっと」遊びに来ませんか。

【宗内 篤夫 教授】

着任して2年目になります。昨年は、周りの様子が良くわからないまま授業、研究を行いました。学生がうまく対応してくれたためか可もなく不可もなく過ごせ、卒研3名も無事卒業させることができました。今年は、卒研5名と専攻工科生2名になりました。主として燃料電池、特に中温形の高分子膜およびその電池について研究をしています。今年は何とか優れた成果を出すべく、学生とともに毎日奮闘しております。

【兼松 秀行 教授】

熱表面処理工学ということで、ここ10年ほどずっと研究活動を続けてきましたが、現在は環境へと舵を切りまして、環境福祉材料工学と銘打って、新しい方向へ進んでいます。教育面では相変わらず創造教育がライフワークです。

【小林 達正 教授】

昨年まで担当していた担任業務が終わり一段落しています。研究は昨年と同様、PVD法による耐食・耐摩耗の作製および金属間化合物の結晶育成について行っております。今年度より、教務主事補を務めさせていただくことになりました。

【下古谷 博司 准教授】

平成4年4月に鈴鹿高専・材料工学科に赴任して以来16年が経過しようとしております。これまで6年間務めた寮務主事補を離れ19度からは学生主事補として、また交通部会長と

して学生指導に微力ながら協力する立場となっております。研究面では、これまで実施してきた環境に優しい水処理剤分野からマイクロ波を利用した有機系廃棄物の有効利用に関する研究に移行しつつあります。一方、最近、放課後等の時間割外の時間に研究室へ顔を出してくれる学生が少なくなってきており、以前のように一生懸命卒業研究に取り組んでいた時代が懐かしく感じる今日この頃です。

【南部 智恵 講師】

平成20年度より実験室の引越しを行い、研究室の隣2部屋が私の実験室となりました。材料系特有の薄暗い実験室のイメージを払拭し、学生が楽しく研究をできるような快適空間へと様変わりいたしました。水素分離膜合金の設計開発に関する研究も大きく前進し、研究室に活気が溢れてきた今日この頃です。

【和田 憲幸 講師】

現在、固体物性、粉体工学、材料物理化学、無機化学の講義を担当しています。研究は、引き続き無機光機能材料を中心に展開しています。昨年の夏から、少し体調を崩しておりましたが、ほぼ健康な状態です。

【黒田 大介 講師】

鈴鹿高専に赴任して3年目になりました。4月～9月末まで同級生の竹内 理君が創造工学の講師として4年生の学習指導を行っていました。他の同級生もちょくちょく高専に遊びに来て来てくれています。皆さんも近くにお寄りの際には、是非お立ち寄り下さい。

【万谷 義和 講師】

本年四月より、赴任して参りました。これまでチタン合金の機能性向上に関する研究を行ってきており、今後もそれを継続しながらも、新たな気持ちで教育・研究活動に挑戦していきたいと思っています。

# 退職教職員

「鈴風」より転載

## 定年の日を迎えて

教養教育科  
齊藤 洪一



昭和44年4月、本校数学科に赴任して以来39年が過ぎ去り、定年退職を迎えることになりました。赴任して以来、「教育一筋一生懸命勤めてまいりました。書くことは色々ありすぎて与えられた紙数では書ききれませんが、高専と共に歩んだ公私にわたる自分史をピックアップして書いてみようと思います。

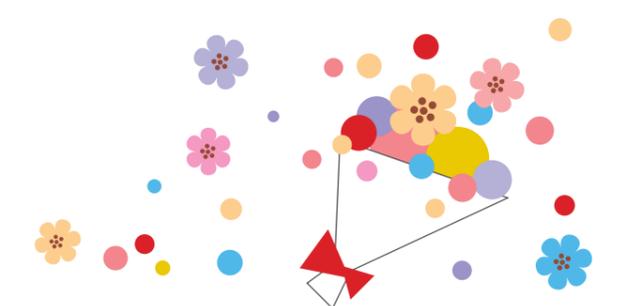
赴任して最初にバスに乗ったとき、バスの行き先に荒神山と書いてあってまず驚きました。あの清水次郎長伝で有名な人口に膾炙している、「荒神山の血煙」の舞台になった所がこんな田舎にあるとは思わなかったのです。この年は春の選抜高校野球で三重高校が優勝した年です。奇しくも私が退職する年に53年ぶりに中日ドラゴンズが日本一になりました。私は中日ファンではありませんが、地元チームが優勝して、私の高専生活の最後の年を祝福してくれました。

学問的な業績はさしたるものはありません。鈴鹿高専の紀要に純粋数学や数学教育に関する論文というよりは雑文を30本くらい書きました。その中で鈴鹿高専のホームページにUPして貰ったバックナー中将に関する一文が10年間で10000アクセスに達したのは嬉しい限りです。これは平成6年に引率で沖縄研修旅行を引率したときの紀行文です

クラブ活動ではハンドボール部指導補佐を昭和45年から20年間、ついで水泳部の補佐を13年間程、そのうち平成4年の一年間だけ部長を務めました。その間、平成15年と16年に水泳部がフジテレビ主催の全国高校ウオーターポイズ選手権で日本一になりました。平成16年には私が日本一の瞬間を直に見ることが出来て望外の喜びでした。私が日本一の瞬間を生で見たのは、この他に、巨人が阪急に勝った試合を西宮球場で、アメリカンフットボールで母校の京大がレナウンに勝った試合を国立競技場で、全国高専体育大会の剣道の試合で鈴鹿高専が鈴鹿市体育館で高専日本一になった瞬間を見えています。高専の体育関係のクラブで日本一になったことのあるチームはたくさんありますが私が直接見たのは2回しかありません。高専以外でも4回日本一の瞬間を見たらうち2回は鈴鹿高専がらみであったのは幸せな事です。その他に鈴鹿サーキットのF1グランプリで本田チームのイルトン・セナがワールドチャンピオン（世界一）を決めた瞬間も見ることが出来ました。20年前のことです。

最後に教育に関してですが、昨今教育に関しては巷でいろいろ喧しい議論がされていますが、私の場合は伝統的な教育法に縛られて、良い教育をすることが出来ませんでした。学生諸君とコミュニケーションをとるとい対話型教育が主流になっている現在、それに対応出来ずに一方的で、準備不足のゆきあたりばったりのその場しのぎの授業、学生諸君を公に亘って十分に面倒を見てあげることが出来ないままに過ごしてまいったような気がします。

先ほどは一生懸命つとめて参りましたと書きましたが、そのエネルギーが空回りになってしまった面はありました。その結果が私に対する授業評価、授業アンケートにも反映していると思います。授業評価の結果も自分で集計して見ましたが、平成10年から開始して途中行かなかった年もありましたから、8年間の私のすべての項目の平均は5点満点で合格点であると思われる3点台を切っています。3点台に到った年もありますが、私の生涯打率はあと1回の機会を残して3点（野球の打率に比すれば3割）台を切りそうです。今年になってやっと授業評価が好成績の人が公表されましたが、それを見ても4点台の教員がごろごろしている中での成績ですからお恥ずかしい限りです。これでは再雇用に対しても戦力外通告は明らかなので、再雇用は辞退する事態となりました。これ以後は再雇用という形でも、非常勤講師という形でも高専には残らないこととなります。ここで改めて学生諸君の皆さん、ご父兄の皆さん、教職員の皆さん、その他高専関係者の皆さんに長い間のご支援に感謝し、高専勤務の間お世話頂いたすべての皆様に厚くお礼を申し上げます。皆様有難うございました。さようなら。



## 教育研究支援室の紹介

### 板谷 年也 (h14D卒)

卒業生の皆様3年ぶりです。お元気でしょうか。私は、学生時代を含め鈴鹿高専10年目になりました。プロ野球では、中堅からベテランといったところでしょうか、社会人としては7年目で日々、勉強中です。ここで、高専卒業後10年ということに着目し、10年選手で元気な卒業生の活動と教育研究室の近況を併せて紹介させていただきます。

今年も、教育研究支援室として、各種プロジェクト（ロボコン・ソーラーカーなど）に参画しました。ソーラーカープロジェクトチームはソーラーカーレース鈴鹿2008に出場し、結果はチャレンジクラスで8位と、昨年を上回る成績を上げました。その上位入賞にTeam Maxspeedというチームがいます。このチームのメンバーは高専卒業生が中心で、在校時代（10年以上前）はソーラーカー同好会でソーラーカーレース鈴鹿に出場し、卒業後も社会人チームとして参加しています。サーキット場で丸となってレースに取り組んでいる先輩方はとてもパワフルです。改めて、高専生の馬力を感じました。

高専卒業後10年という、職場には、上司、先輩、同期の他にも後輩と、様々な人間関係が存在し、チームワークがより重要になってくると思います。皆様は、高専で培ったチーム

ワーク力を多に発揮されていると思います。これからも、皆様のご活躍を願っております。

教育研究支援室も発足2年目となりました。まだまだルーキーですが、組織としてよりチームワーク力を高め、高専の教育研究活動に貢献できるよう頑張っていきたいと思っています。



TeamMaxSpeedと本校ソーラーカープロジェクトチーム



## 懐かしき高専回顧

教養教育科  
宮崎 雄三

定年、第2の人生！

人ごとの様に考えていたこの2文字。今年度をもってこの2文字を迎えることになり感無量です。37年間の長きに亘って勤めることができました鈴鹿高専、過ぎてしまえば、まさに一瞬の出来事であったような感慨を覚えます。心は何の曇りなく晴れ晴れした心境。ここまで長きにわたり勤め上げることができましたこと、これ一重に多くの方々の多大なるご支援とご厚情のおかげと深く感謝、感謝の一言です。

本校にお世話になったのが昭和45年で、まだ大学を卒業して教育現場での経験が浅い私でした。この年は私の高専生活幕開けの劇的な年でもあり、生涯忘れられない思い出の年ともなりました。この年に全国高専体育大会が本校主管にて開催、全種目をしかも会場を伊勢市に移して全教職員が一丸となって大会が実施される年でもありました。着任早々、記録班長という大任を仰せつかり大変な緊張感のもとで、まだ教職員の顔も名前もわからない中、記録班の構成メンバーの方々と打ち合わせや準備、大会前日より伊勢市に泊り込み、台風接近による深夜の会場見回り等、新任の私どもをいろいろとサポートしていただき、何とか無事に終了できた時のプレッシャーからの開放感・安堵感、当時の光景が目にはやき付いています。現在では聞かれなくなった全国高専体育大会の歌がこの大会時、当時名代の校長であった初代木村校長の鶴の一声によって作られ、開会式での全種目の入場行進で流されたこと、今や、このような歌があることすら知られなくなってしまった古の懐かしい思い出です。

体育行事も当時は実にバラエティーな行事が企画されていて、まず臨海水泳訓練が白子の鼓が浦海岸にて全学生、午前と午後の2班に分かれての4日間の水泳訓練、最後に遠泳が実施された事や、終了時での赤く日焼けした肌でしばらく風呂にも入れなかった当時の苦い思い出。47年にプールが完成して水泳訓練もなくなり、それに代わって校内水泳大会が実施されたこと。課外活動の一環として、学生有志を募ってのスキー実習。初回（45年）は赤倉スキー場で実施され、次年度より志賀高原山田温泉スキー場に場所を変えて学生と共に、当初はなかなか思うような滑りができず悪戦苦闘し、転びながらの滑走での痛快感・爽快感、またホテルでの上級生との一献を交わしながらの楽しい語り。さらに開校以来、現在まで唯一の体育行事として継続してきた校内マラソン大会。当初は校内クロスカントリー大会の名称で8Kmコースで実施していたが、道路事情等、諸般の事情により、6Kmコースとなり、さらに3.5Kmコースと距離短縮を余儀なくされ、残念

ながら本年19年度をもって幕を閉じる事となりました。若かりし頃は、授業時に学生と一緒に8Kmコースを駆けずと走り抜いた当時の勢いは今何処へ。

学生からは色々なパワーを授かりながらも如何せん、年齢という壁には争えない空しさ、はかなさを感じる今日この頃です。以前は何かと、各学科教員、職員間との色々な交流の場での意思疎通の機会があり、一体感が感じられ、人間関係にもゆとりのある時代であったなと回想しています。

現在、教育現場を取り巻く環境も、学校自体も、そこで学ぶ学生達も時代と共にずいぶん変わってまいりました。その時代の変化を痛感しつつ如何に学生と関わっていくか、常に試行錯誤の連続で、毎年課題を残しながらの教員生活で学生諸君に対しては果たして良い教師であったかどうかは不可解！私個人としての想いは、この37年間、学生諸君から若さ、パワー、感動を授けられ、それによって鍛えられ、学生と共に歩み、パワーアップでき、まあまあ納得のいく教員生活であったのではなかったかなと自問自答しつつ教員生活へthe end。

これからは everyday Sunday。しばらくは体力作りにて体調を整えつつ趣味の蕎麦打ちや詩吟、釣りとか畑仕事などをして、決して酔生夢死な生活にならぬ様に心掛け、今までとは違った生きがい求めて日々過ごせばいいなと考えています。余裕があればボランティア活動にて貢献の場がもてればと、色々ささぎの生活に思いを馳せています。

最後に学生諸君に吟での一曲を、

勤学の歌

陶淵明

盛年重ねてきたらず

一日再びあしたなりがたし

時に及んでまさに勉強すべし

歳月は人を待たず

鈴鹿高専のますますの飛躍を期待しております。



## 19年・19年・19年・19年

教養教育科  
松林 嘉熙



学生主事職である。学級担任は40名を見守る。学年主任は200名と語れる。学生主事は全学1千名の全学生と等距離で、直に触れ合える。ちょうど学生指導の理念を、補導から支援に変えようとする時期であり、その方向転換の現場に居あわせ、自然体で仕事に向き合いたい自分の性向と合致していたことも恵まれていた。学生支援を念頭に、新入生の初期導入教育向けの『キャンパスライフ』の刊行、校内情報共有化のための「ふおと広報」の貼付と更新、そして広場に舞台を設けて学生が主人公の「高専祭」の演出など、元気で楽しいキャンパスへの脱皮を図るための毎日は、充実した日々だった。

その最中、鈴鹿高専40周年記念事業の一環として記念誌編纂の仕事が舞い込んだ。従来は10年毎に当該10年に記述を限った冊子を発行してきたが、今回は「見て楽しく読める」よう、写真を主体として40年を総括するという編集方針だった。文字を控え目にして写真で語らせるという前例のない、しかもあとあとまで歴史として残る冊子を20ヶ月で仕上げねばならない。事務の書庫にある発足当初の会議資料から全部読み直し、時系列で簡潔な文章にまとめ、必要な写真は撮りに走るなど、徐々に版下原稿の枚数が増えていくにつれ、これも楽しい仕事となった。この過程で、在籍する全学生全教職員に青空広場に集まってもらって撮影した集合写真は、企画時の計算を凌駕する出来栄で、『40年誌』全270頁の中ほどの見開き2頁を飾るに足る迫力あるものとなった。

ここ2年間は高専紹介PRビデオの制作を担当した。学校行事で活躍する学生の姿を追い、企業戦士を現地訪問し、国際化を標榜する教育機関として学生が韓国研修旅行に出れば同行し、アメリカへの語学研修にも引率兼取材など、どの現場でも自律ある行動で突き進む学生やOBの爽やかな姿を、その都度ビデオに収めることができた。集中力が全ての編集作業は秒単位のカットの積み上げだが、取材もこれも未知の世界だっただけに、その踏破は面白かった。

そして今日、晴れ上がった空を研究室の窓越しに見ながら、10年このかた編集主幹をつとめる『鈴風』に自らの退職の辞を書いている。

授業はもちろん、途中の皮肉も冗談もきっちり受け止め、授業評価もそれなりに記してくれた学生の皆さん、ともに楽しく勉強できて幸せでした。教職員の皆様、お世話になりました。38年間、ありがとうございました。

昭和38年、教職につくことを前提に大学を選んだ。7年後、幸いにも実家から車で10分の至近距離の国立高等教育機関に職を拜命したのち38年が経過し、この春、定年を迎えることとなった。

平成19年度に教員卒業とは、昭和の年号数と高専教員退職年齢が同じ63であるため、昭和19年生まれを意味する。そしてこのうち私は昭和の最後の19年間と平成の最初の19年間、教職をつづけた。表題の19-19-19-19とは、昭和19年生まれが昭和で19年、平成で19年勤め、そして平成19年度に退職となる自分にまつわる、この数字の巡り合せが気に入った故である。

昭和の19年間はもっぱら学級担任6期で明け暮れた。1期2年持ち上がりで満了となると次の1年は校務分掌なしの慣例だったのでこの数字になるが、厳しい校則・寮則への学生対応が重なり、この頃は気苦労の絶えない、力技も要した時期であった。個性ある学生との和やかな局面も無くはなかったが、総じて毎日どんよりした「曇り空」であった。

年号が平成になり、校務が学年主任になった途端、気分は「連日快晴」になった。どことなく学生に自信と誇りが備わりはじめ、校風も明るくなった。学級担任からの指導も遅滞なく行きとどき、学年主任は自信を込めて「このクラス、この学年はみんな素晴らしい」と、授業や学年集会のたびに、誉める事を本業に出来るようになった。沖縄への高専初の研修旅行が完璧に終始し、記念文集まで刊行できたのも、この学生集団と担任のまとまりのお陰で、教員生活中、印象に残る思い出である。

連日快晴のもうひとつの理由は、昭和32年に卒業した鈴鹿市立河曲小学校の百周年記念誌の編纂依頼をうけて、その執筆に昭和63年から5年間没頭できたことにある。高専での本業が快調なので、副業もまた快調だった。従前から関心のあった地方教育史の掘り起こしの幸便として、小学校所蔵の基礎資料にくわえ、江戸後期からの地域固有史料の発掘、三重県と鈴鹿市の各史料編纂室での史料閲覧、そして近隣校区での聞き取り調査など充実した毎日が過ごせた。企画構成から執筆、装丁まで全てを担当して『かわの百年』に仕上げた。研究論文は単著で30本ほど書いてきたが、この1冊にはそれらにも優る格別な思いを今も抱いている。

学年主任を3期6年つとめたあと、平成9年、それまで理事、副会長を勤めていた全国高専英語教育学会の会長職がまわってきた。前身の全国高専英語教育研究協議会にも関わっていたので、規模も活動もさらに隆盛にしなければとの責任を感じた。2年間鋭意努力し、良質の学会誌の刊行や学会規模の広範化など、それなりの成果は得たように思う。

一番楽しかった校務は平成11年から3期6年つづけた



## 一期一会

事務部長  
大江 恒晴

鈴鹿高専の職員として通算5年間在職し、本年3月に定年を迎えることになりました。1回目は庶務課長として平成10年から3年間、2回目は事務部長として平成18年から2年間の計5年間です。

この間、校長、主事、学科長、後援会会長、をはじめとする教職員の皆様に支えられたことに心から感謝しております。また一方、皆様には仕事とはいえ随分とご迷惑をかけた反省の気持ちも錯綜している今日この頃です。

平成10年4月に初めて鈴鹿高専に足を踏み入れた時は、水平的な投影を感じさせるキャンパス、1号棟屋上の日の丸と校旗、時計が印象的でありました。校舎に入ってから、建学の精神「尚武勉学の校風、知・徳・体・体育の全人教育、愛され信頼される逞しいエンジニア・ジェントルマンの育成」が学校要覧に示されており、今からこの理念で仕事をしなければと自覚しました。また、当時の全国の高専では、専攻科の設置、学科の改組等を競争していたのですが、鈴鹿高専は第一期校（昭和37年度設置）としての実力を如何なく発揮し、既に、専攻科は平成5年（全国で2番目）に、工業化学科の改組は平成9年に実施されており、校長をはじめとする教職員の高専教育に対する熱意に感動し自分もしっかりやらなければと緊張感をもったことを覚えています。

1回目の勤務で特に印象に残っていることは、サティ開店、学生負傷問題等に関わる教育後援会役員等との連携、地域社会との連携強化策としての三重県、鈴鹿市、鈴鹿商工会議所等との調整、産官学交流会、学校開放事業の立ち上げなど大変でしたが、現在の基本的なスタイルができあがり、楽しい思い出であります。公務員時代によく言われました研究・教育職の生産マンと事務職の営業マンがうまくかみ合っただけで当時の第一線を走れたのではないかと考えていますが、これも校長のリーダーシップの下での教職員の努力のたまものと感謝しております。

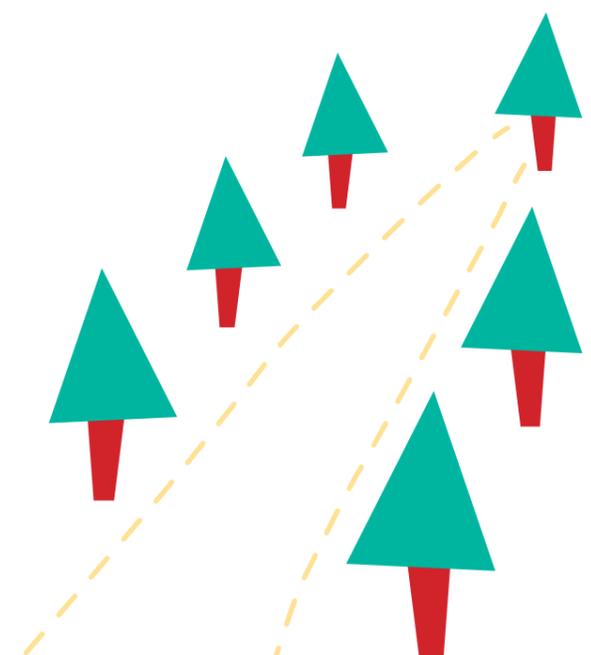
今回の勤務では、事務部の3課体制（庶務課（技術室を含む）、会計課、学生課）を2課・1室体制（総務課、学生課、教育研究支援室）に整備し、平成19年から実施することに関わることができました。今後における事務部の展望は、機構本部における事務改善の動向等とも関わってきますが、構成員一人一人が当事者意識をもって、専門的、事務的な調整を円滑に行うとともに、執行管理を適切に遂行できるよう、事務部体制の意義と役割をお考えいただければ幸いです。

また、一番大きな出来事として、平成18年9月に高専機構が「国立高専の整備について～新たな飛躍を目指して～」に沿って個性輝く魅力ある高専を構築するとの観点から、その一環として鈴鹿高専と鳥羽商船の再編統合の検討要請があったこと（当初は再編統合でしたが、現時点では再編整備となっております。）。この問題は、今後、平成19年10月に中央教育審議会大学分科会高等専門学校特別委員会の審議経過報告「高等専門学校教育の充実について--ものづくり技術力の継承・発展とイノベーションの創出を目指して--」、文部科学省で現在検討中の高等専門学校振興計画、高専機構の第二期中期目標・計画等を踏まえて進捗すると思われませんが、校長のリーダーシップの下で鈴鹿高専のこれまでの教育研究の実績を基に対応すれば、明日を拓く輝かしい総合高専に立ち上がるのではないかと確信しております。

鈴鹿高専を去るにあたり、この仕事に従事できないのが心残りではありますが、校長をはじめ教職員の皆様のご活躍に期待をしております。

鈴鹿高専の通算5年間、本当にお世話になり有り難うございました。特に、昼休みのテニスの思い出は最高でした。このテニスがあったお陰で楽しく働くことができました。心から厚くお礼申し上げます。

最後に、皆様方のご健勝と鈴鹿高専の更なる発展をお祈り申し上げます。



## 定年退職にあたって

昭和42年4月本校に採用され、会計課出納係から始めて、以後会計課に23年、庶務課に9年、学生課9年の41年間という長きにわたりお世話になり、定年退職の日まであと2ヶ月余りとなりました。

私の最初の仕事は、授業料等の学納金の徴収事務でした。その頃は現金での納付が主で、4月と10月の授業料等の納入の時期には現金との格闘でした。次に担当した給与支給事務は、その当時、もちろん今日のようなコンピュータは存在せず、給与簿は手書きで、そろばんが唯一の計算手段でした。当時は毎年ベースアップがあり、12月には4月に遡って給与の差額が支給されましたが、その差額計算、年末調整もそろばんをはじめとするわけですから、今から考えればなんと手間のかかることを、一生懸命やったものでした。

その後、庶務課を経て、学生課での9年間は教務、入試の担当として、まずは学生さんから「信頼」される仕事をするを第一に業務に携わってまいりました。鈴鹿高専がJABEEの認定を受け認証評価を受審し厳しい中にも発展を続ける中で、私自身は貢献は出来なかったものの学生の教育、学習に関わる業務に多少なりとも携わらせていただいたことは幸せに思っています。



## 退職にあたり

昭和43年4月、学生係に採用になり、2年後当時の金属工学科教室係となり、寮係、図書係、教務係と移動を繰り返して、そして、最後は再び寮係へと経た、あっという間の40年間でした。常に学生課の中で働かせていただき、学生と直接対話できる部署にあり、学生の活躍を自分のことのように喜ぶのは幸せなことでした。就職を喜び、進学を喜び、優勝を喜び、学生の笑顔を励みに、同僚職員と日々の仕事に励んできました。しかし、さまざまな個々の事情で学校を途中下車していった学生があるたびに、どこかで頑張ると、わが子のことのように願って送り出したものです。

平成18年度に独立行政法人となって4年がたちました。高度な教育を行うために、効率のある組織を作り上げようと、教職員一体となりより良い教育を求めている意識改革がなされつつあるところです。これからも学生、教職員の皆様が益々活躍され、鈴鹿高専が発

学生課  
荒川 京子



しております。41年間を振り返ってみますと、その時々においてご指導くださった上司、先輩、公私に渡り支えてくださった方々のおかげでここまで幸せに勤めさせていただいたんだと、今更ながら感謝の気持ちでいっぱいです。本当に有難うございました。

最後に、お世話になりました鈴鹿高専の益々の発展と、学生、教職員の皆様のご健勝を心よりお祈り申し上げます。



学生課  
原田 禮子

展していくことを祈っています。私は鈴鹿高専の校歌が好きでした。校歌の一節にありますように「鈴鹿高専」の名を誇りとして退職します。関わりいただきました教職員、学生のみならず、ありがとうございました。



# 鈴鹿高専ヒューマン&テクノロジー ネットワーク (SHTN)

第9回総会  
第17回技術交流会  
開催のお知らせ

日時：平成20年11月29日(土) 13:30～  
場所：鈴鹿高専 マルチメディア棟 視聴覚室

13:30～ 総会  
14:30～16:40 技術交流会

## 基調講演

(1) 澄野 久生 様 (44M)  
「産学官連携活動」に関連した講演

(2) 鈴鹿高専 生物応用化学科 山本 智代 准教授  
「女子中高生の理系進路選択支援事業」に  
関連した講演

## 一般講演

(1) 小木曾 静香 様 (h10M) 太陽化学 (株)  
(2) 前坂 海香子 様 (h18M) 三重金属 (株)

17:00～ 懇親会 (第1会議室)

※講演者は変更になることがあります。

平成19年度  
青峰同窓会

## 会計報告

### 収入の部

摘要	金額(円)
平成18年度からの繰越金	42,815,251
平成19年度卒業生等より(18年度卒業生) 入会金・終身会費(208名)	2,288,000
預金利息	52,795
合計	45,156,046

### 支出の部

摘要	金額(円)
会報発行経費	744,482
事務費	160,190
次年度へ繰越金	44,251,374
合計	45,156,046

平成20年度  
青峰同窓会

## 会計予算(案)

### 収入の部

摘要	金額(円)
平成19年度からの繰越金	44,251,374
平成20年度卒業生(19年度卒業生) 入会金・終身会費(219名)	2,409,000
合計	46,660,374

### 支出の部

摘要	金額(円)
総会、理事会等の会議費	50,000
会報発行経費	1,000,000
事務費	150,000
次年度へ繰越金	45,460,374
合計	46,660,374

## 編集後記



この会報がお手元に届く頃には衆議院選挙が終わり、新しい内閣が発足しているでしょうか。アメリカの新しい大統領は決まっていますでしょうか。高専も約半世紀を迎えようとしている現在、社会から求められるものも大きく変わってきています。次の半世紀を作っていくためには、新しい力とともにこれまでの伝統を引き継ぐ卒業生の支援が欠かせません。卒業生の皆様におかれましては、巣立った鈴鹿高専を絶えず見守り支えていただきますよう、お願い申し上げます。その架け橋の一つとして、この会報が役立つことがあれば幸いです。

北村(47E卒)

## 誌名

青峰同窓会会報

## 発行日

2008年10月

## 発行

国立鈴鹿工業高等専門学校  
青峰同窓会 広報委員会  
〒510-0294 鈴鹿市白子町  
☎ 059-386-1031

E-mail/almn@suzuka-ct.ac.jp

ホームページアドレス

<http://www.suzuka-ct.ac.jp/~almn/>